

社会学的に“面白い”研究とは何か？：『鍛える』以前の人へ

藤本，延啓

<https://doi.org/10.15017/7388826>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，pp. 137-147，2025-10-01．三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン：
権利関係：



社会学的に“面白い”研究とは何か？

—『鍛える』以前の人へ—

What Is Sociologically "Interesting" Research?:

For Those Who Are at the Stage before "Forging"

藤本 延啓

◎本章のねらい

- ・「(社会学的な) 研究」の意味がつかめないまま大学院に入ってしまった
 - ・社会（問題）に対する関心はあるが、それを「研究」にするにはどうしたらいいのかわからない
 - ・ゼミで発表をしたら「面白くない」「研究になっていない」などと言われてしまった
- そんな「問いを鍛える」以前の人たちに向けて、「社会学的に“面白い”研究とは何か？」というお話、つまりは、自分の関心をどうすれば「(社会学的な) 研究」として成立させていけるのか、についてのお話をします。

◎とくに読んでほしい人

あなたは、大学院に入って初めて「(社会学的な) 研究」に取り組んでいる。いったいどうすれば、自分の関心事を「(社会学的な) 研究」にできるのか、さらに「面白い」と言ってもらえるような研究はどんな研究なのか、よくわからずに悩んでいる。

1. 「鍛える」以前の人へ

最初におことわりしておきます。本書のサブタイトルは「問いを鍛える作法」ですが、この章は「いやいや、自分は『鍛える』以前の問題です」という（まるで大学院生のころの私のような）人向けの内容です。なので、文字通りの「問いを鍛える」内容を期待されている読者は、この章は飛ばしてもらってかまいません。

私が大学院で研究発表をした時、A 先生は（真顔で）こうおっしゃいました。

「藤本くん、それは研究として面白くないね」

また別の時、B 先生は（ニヤリとしながら）こうおっしゃいました。

「藤本は話すと面白いけど、書くとおつまらないよね」

さらにまた別の機会で、C 先生は（「ほっほっほ」と笑い声をたてながら）こうおっしゃいました。

「藤本さん、それは社会学に対する忠誠心ですか？」

これら 3 つのお言葉は、研究者をめざしていた私には正に金言でした。その時からずっと私の脳裏に焼き付いています。事あるごとに、私の心をチクリと刺します。

本章の目的は、これら 3 つの金言を軸にして、院生時代から現在にいたるまで迷い続けた私の経緯をたどり、「社会的に面白い研究とは何か？」ということ、ひいては「社会的な問いとは何か？」「社会的な研究とは何か？」ということについて、みなさんと一緒に考えていくことです。

ところで、A 先生に「研究として面白くない」と言われた時に私はちょっとイラッとなりました。B 先生に「書くとおつまらないよね」と言われた時は「そうだよね」としょんぼりしました。C 先生に「社会学への忠誠心ですか？」と言われた時はゴーンと頭を殴られた思いでした。「イラッ」「そうだよね」「ゴーン」、この 3 つの感情の違いは、3 つの金言と私との関係を端的に示しています。これらのことについても、追々お話ししていきたいと思います。

2. 研究として面白くないね

2.1 どんな研究なら面白いんですか！

私が A 先生に「研究として面白くない」と言われたのは、修士課程 2 年の時、ゼミで研究報告をした時でした。私がどんな報告をしたのか明確には覚えていませんし、そのころのデータやプリントをひっくり返しても、「これだ」と思える資料は見つけれませんでした。が、当時の私が取り組んでいた「福岡県内の市町村における家庭ごみ処理政策」に関する調査報告と、今後の研究構想のような内容だったと思います。とにかく、私はゼミで発表をして、それを評して A 先生が「研究として面白くない」とおっしゃり、それに対して私は（おこがましくも）イラッとしたという、一連の流れと感情が胸に刻み込まれているのです。

その時、「じゃあ、どんな研究が『研究として面白い』んですか！」私はそう言いたかつ

た（いや、その場で言っていたかもしれない。そんな気がしてきた）。なぜなら、私としてはそれなりに「面白い」と思ってその報告をしていましたし、実際、別の場（ごみ問題そのものに関心を持つ人々による研究会。市民活動家、行政職員、コンサルタント会社の社員、リサイクル事業者、工学や経済地理学の廃棄物研究者、といった人々が参加していました）で同種の報告をした際には、「面白い」「この方向で続けてほしい」という反応があったからです。この評価の違いはなんだったのでしょうか。

2.2 「問い」の違い——「どうしたらよいか」と「なぜか」

先に書いたように、その時の報告資料は見つかりませんでしたが、関連する A 先生の別のコメントを見つけることができました。時期的には先の報告より（たぶん）後になる「修士論文中間発表会」（2000.6.22）のレジュメに、A 先生からいただいたメールの内容として私が引用していたものです。それは、

今のあなたの第一義的な問いは、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」であるように思います。しかし入学当初のあなたの問いは、むしろ、「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」にあったように思います。

というコメントでした。

A 先生がおっしゃる「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」と、「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」には、どのような違いがあるのでしょうか。また、なぜ私の「第一義的な問い」は、大学院入学当初の「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」から「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」に変わったのでしょうか。それらについて、当時の私は次のようにレジュメに書いています

私は「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」を避けて、言い換えれば、「それを考えなくてもごみ問題を解決できる方法を探そうとしている」のが最近の状態だったような気がします。

そのころ（修士2年）の私は、福岡県内の家庭ごみ処理の現場に出かけたり、自治体の廃棄物政策の担当者に話を聞いたり、ごみ減量の取り組みをする市民といっしょに活動を

したりといった、現地調査や参与観察に力を注ぎ始めていました。

一方で、大学院に入学した時点での私は、ごみ問題そのものに関心を持ちつつも、「社会的ジレンマ」に理論的な興味を強く惹かれていました。そもそも、この大学院への入学を志したのは、社会的ジレンマに関わる研究をなさっている A 先生にご指導をいただきたく思ったからでした。ところが、「修士論文中間発表会」のレジュメには、「社会的ジレンマ」は全く登場してきません。

修士 2 年のころの私にとって、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」は、正に研究上の「問い」ではありましたが、「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」といった「それより前の段階の問い」「社会の有り様につながる問い」「理論的な問い」に関心が向いていませんでした。当時の私は「現場」で体感するインパクト（処分ができずに積みあがっているゴミ、埋め立て地の悪臭、担当者が困っている様子など）の表面的な部分に強く影響されて、その状況や当事者の言葉の背後にあるはずの「それより前の段階の問い」「社会の有り様につながる問い」「理論的な問い」を見失ってしまっていた（あるいは、半ば故意に意識の外へ追いやっていた）。...ということだったのかなと思います。

2.3 「面白さ」の違い——社会学的にはどうなのか

さて、私の報告に対する A 先生による評価と、別の場での評価が正反対だったのはなぜだったのでしょうか。それは「場による面白さの違い」によるものです。「社会学を学ぶ場」であるゼミで求められていたのは「社会学としての面白さ」であり、「ごみ問題そのものに関心を持つ人々が集まる場」である別の研究会で求められていたのは「ごみ問題調査としての面白さ」でした。

そういう意味では、「研究としての面白さ」と「“社会学的”研究としての面白さ」は分けて考える必要があります。あるいは、「事象・事例そのものの面白さ」と「“社会学的”研究としての面白さ」を分けて考える、と言い換えても（やや意味合いが限定的になりますが）いいかもしれません。いずれにせよ、自分の研究を「社会学の研究」として成立させたいのであれば、「社会学としてどうなのか」ということを考える必要があります。なぜなら、社会学としての「面白さ」は、事象や事例そのままの「面白さ」とは一線を画するものだからです。逆説的な言い方になりますが、ある具体的な事象や事例そのものに強い興味があるようならば、「社会学としての面白さ」にこだわる必要はありません。別分野の研究として「面白さ」を追求すればいいわけですから（ただし、大学院生の場合は、指導教官を

別の先生に交代していただいたり、所属を変えたりする必要が出てくるかもしれません)。

今振り返ってみれば、「社会学を学んでいこう」「社会学を通して社会問題を考えよう」と思って大学院に入っておきながら、その「社会学」の部分を見失っていた当時の私にとって、A先生のコメントは本当にぴったりのご指導だったと思います。ですが当時の私には、そのご指導を理解するだけの力はなかったらしく、レジュメには事例紹介が並ぶばかりでした。私がA先生のご指導の重要性に気づくには、さらなる経験と時間が必要でした。

課題 1) あなたの研究は「面白い」だろうか。また、「面白い」とすれば、それはどんな「面白さ」だろうか。

3. 社会学への忠誠心ですか？

3.1 「忠誠心」の含意

博士課程に進学した私は、(幸運にも、いわゆる「学振」の研究費を得られるようになって) 現地調査により傾倒していきます。先進的な廃棄物政策を実行していると評判の自治体、大規模な不法投棄の現場、離島の密かなごみ捨て場など、当時住んでいた福岡から遠く離れた土地へも頻繁にでかけるようになって、足しげく通うフィールド(青森県田子町、岩手県二戸市、香川県豊島、徳島県上勝町、熊本県水俣市など) もできました。自宅のアパートにいる時間より、どこかにでかけている時間の方が長くなったほどです。

「藤本さん、それは社会学に対する忠誠心ですか？」というC先生のお言葉は、そんなころにC先生のゼミで研究報告をした際のお言葉なのでした。言うまでもなく、これはC先生による強烈な皮肉です。私なりに言い換えるなら、「概念の使い方があまりに形式的で無意味ですね。『本当は必要だとは考えていないけれど、社会学に対する忠誠心からとりあえず概念を載せている』とでも解釈しないと理解できないほどに」といったところかなと思います。

そんなことを言われてしまった状況について、もう少し具体的に説明します。それは博士論文の構想に関する3回目の報告でした。レジュメ(「博士論文構想発表(3)」, 2003.1.15)を見ると、「分析枠組みとして、舩橋晴俊の一連の理論研究を『社会的ジレンマの7類型』を中心に援用する」との記述があります。当時の私は(明確な「問い」も無いままに続けていた) 調査で得た情報を“社会学的な研究”に見せようとして、有名な舩橋晴俊先生の「社

会的ジレンマの7類型」「受益圏－受苦圏論」を持ってきたわけでした。つまりは“よさげな概念”をポンと当てはめただけで、それで“社会学的な研究”になった気でいたのです。

その背景として、A先生による「研究として面白くない」という言葉を、私がそれなりに気にし続けていたということがあります。浅はかな私は、「それらしい形を整えれば“社会学的な研究”になるのではないか」と思って、舩橋先生概念を持ってきて当てはめたのです。当時の私は、「社会学的な面白さ」よりも「研究事例そのものの面白さ」の方を圧倒的に強く感じていましたので、社会学らしい形を整えることで「社会学を学ぶ場」での評価も得ようとするような、姑息な考えだったのかもしれません。しかし、C先生の「忠誠心ですか？」というお言葉は、そんな私の浅はかさや姑息さをガーンと見事に打ち砕いてくださいました。

3.2 「問い」の再発見

本書で三隅一人先生が「どこから手をつけてよいかわからない、ということがあるだろう。そこは論文を読み漁るしかない」（三隅 2025）とおっしゃっているように、C先生に打ち砕かれた私がまずすべきことは「論文を読み漁る」ことだったのかもしれません。ですが私は、「読み漁る」というほどには論文は読まないまま、よりフィールドに接近していくことを選択しました。「足しげく通う」からもう一步踏み込んでの「移住」です。ただ、「学振」の期間が終わってしまいましたので、研究と生活のためにお金を稼ぐ必要がありました。そこで、業務内容がそのまま参与観察になるような仕事につきました。

まず、2004年の夏から1年ほど、瀬戸内海の離島である香川県の豊島（てしま）に引越して、不法投棄問題に関わる住民組織の事務局員として働きました。次に2005年の秋から1年半ほどは、「いろどり」と「ゼロ・ウェイスト」で有名な徳島県の上勝町（かみかつちょう）に住み、廃棄物政策に関わるNPOの臨時職員として働きました。いずれの経験も、私に大きな変化とかけがえのない研究上の財産をもたらしましたが、ここでは特に豊島での『問い』の再発見についてお話しします。

豊島は周囲約18kmの小さな島です。島内で発生した日本最大規模の不法投棄事件が繰り返し報道されて有名になってしまった島ですが、同時に、島の人たちがこの問題に真面向から立ち向かい、地道な住民活動を長く続けていることでも有名な島です。私は2001年からこの豊島に通いはじめ、曲がりなりにも島の人々に顔と名前を覚えていただいていたことから、住民組織の事務局員として活動の一端を担わせていただけることになったので

した。

実際に現地に住んでみて気がついたのは、「住む」と「通う」とでは本質的に異なるということでした。特に印象に残っているのは、共に暮らし、共に働く中で、島の人々の私に対する接し方が変わっていったことです。その当時、島外からの移住者があまりいなかった豊島では、私は「よそから来た珍しい兄ちゃん」でしたが、それだけではなく、「よそから来た兄ちゃんやけど、豊島の暮らしや、微妙な人間関係をある程度理解している兄ちゃん」あるいは「豊島のことはある程度知っていて、前置きなしに地元の話ができるけれど、種々のしがらみとは関係がない、よそから来た兄ちゃん」という認識のされ方になって（そういう立場を築いて）いきました。例えば、私が豊島に住んで1年近く経ったころ、ある人が「藤本くんやから言うんやけどな」と言いながら、島内の政治的な実情についての話を愚痴るようにしてくれたことがありましたが、それは私の豊島における独特な立場を象徴する出来事だったと思います。

いずれにせよ、豊島で暮らすうちに、通うだけでは気づけなかった事どもが見えてくるようになりました。例えば、移住する前の私からは「重大な不法投棄問題が起きた島」「不法投棄問題に一致団結して立ち向かった、すごい住民たちの島」と豊島が見えていましたが、豊島で日々を暮らしていると、島の人たちとはもっと基本的な生活課題（例えば、高齢化、医療、買い物など）の方がよく話題になりますし、不法投棄問題に対する活動に特に関心が無い（むしろ辟易しているような）人もいます。そこには生活者それぞれの日常があり、暮らしや人生に基づく様々な価値観があったのでした。

また、豊島は小さな島ではありますが、島内には「地域性」が存在しています。不法投棄問題に関することで言えば、例えば、地域ごとに問題の捉え方が異なる条件として、不法投棄現場と地区（島内地域社会）との地理的な位置関係を挙げることができます。不法投棄現場は島の西端にあります（島中がごみで埋まっているわけではありません）から、島の東端の地区では、廃棄物からの間接的な被害（風評被害など）はあれども、直接的な被害（地下水汚染や野焼きによる煙の害など）を受けることはありませんでした。つまりは、島内の地域によって「何が問題なのか」についての受け止め方が異なる背景があるし、住民に認識される「解決」の方向性も異なってくるということです。

さてここで、先に紹介した A 先生のコメント

今のあなたの第一義的な問いは、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」であ

るように思います。しかし入学当初のあなたの問いは、むしろ、「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」にあったように思います。

を思い出してみます。修士2年当時の私にとって、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」は確かに「第一義的な問い」でした。しかしそれから5年後の私は、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」といきなり問うのは、あまりに実情からかけ離れたことだと感じるようになっていました。なぜなら、私の豊島での毎日は（住民運動組織の事務局としても、島の住民としても）「ゴミ問題の解決」の前に考えないといけない山ほどの課題（「問い」）に直面し続ける毎日だったからです。それは、「解決できないのはなぜか」という問いにつながる課題（「問い」）でもあり、さらには、「解決できないのはなぜか」の前段階にある問い、つまりは『「解決」とは何か』という新たな問いにつながる課題（「問い」）でもありました。これは、フィールドでの経験の積み重ねが私にもたらした、『「問い」の再発見』でした。

ここまできて私は、本書で三隅先生が「読み漁るしかない」（三隅 2025）とおっしゃっている、文献レビューの重要性がようやく腑に落ちました。つまりは、社会学の先人たちの成果を（「忠誠心？」と言われてしまうような当てはめではなく）活かしていかなければこれより先には進めないという実感です。言い換えれば、これも本書で三隅先生がおっしゃっている「問いの明確化とレビューの拡充は、往還的に進む」（三隅 2025）という段階の入り口によくたどり着いた、というところでした。

課題 2) あなたの研究上での「問い」は何だろう。「問いのようなもの」でも構わないから、ひとつに限らずに、思いつくままどんどん書き出してみよう。

4. 書くとおつまらないよね

4.1 書くとおつまらなくなる理由

さてここからは、3つの金言の残りひとつ、B先生による「藤本は話すと面白いけど、書くとおつまらないよね」というお言葉についてお話しします。これもゼミ報告の際にいただいたお言葉で、時期的には「忠誠心ですか？」よりも前の、「研究として面白くないね」と同じころのエピソードなのですが、これは研究のアウトプットにかかわるお言葉ですから、最後に取り上げることにしました。

なぜ「書くにつまらない」のか。実は、その理由は当時の私にもわかっていました。それは「私が、裏付けが取れていない情報や自信がないことは書かなかったから」です。例えば「現地調査で地元の人から聞いた話」は、エピソードとしては非常に興味深くても、その裏付け（事実関係、科学的根拠等）が取れていなければ文章にするのを躊躇してしまいます。また「調査の中で思い至ったなんとなくの考え」は、口頭での報告で触れることはできても、十分な検討を重ねていなければ、まとまった文章にはなりません。

「話」をするときには、聴衆の反応を見ながら言葉を継ぎ足していけますし、「これは裏付けが取れていませんが」などと付け加えながら喋っていくこともできますが、「書く」となるとそうはいきません。結果として、「話」で興味をもってもらえた部分は「書く」際に大部分がカットされて、骨組みだけのつまらない言葉の羅列が残る、というわけです。

4.2 20年越しの脱却

お恥ずかしい話ですが、この「書くにつまらない」からある程度脱却できた（脱却するためのベースができた）と私なりに実感するに至ったのは、それから20年ほど経ってから2020年でした。2020年は日本で新型コロナウイルス（COVID-19）への感染が急速に広がった年です。この年から数年間は「コロナ禍」と呼ばれるほどに、日本社会に大きな影響が現れました。密閉・密集・密接の「3密」を避けることが叫ばれ、遠方への移動や他人との直接的なコミュニケーションを悪いことと見なすような風潮もありました。私の勤務先でも「不要不急の出張は避けてください」との通達が出され（...出張はそもそも「今、必要」だからするのであって、「不要不急の出張」なんてあるのかな？と思ったりしました）、調査を目的とする出張は実質できない状態になりました。

現地調査を封じられた私がとった対応は、文献を読み漁ることと、論文をきっちり書くこと、つまりは「ちゃんと勉強して、ちゃんと考え切って、ちゃんと書く」という、今更ながらの当たり前のことでした。例えば、この時期に出会った文献の中で『学術の動向』の「特集1 コミュニティを問い直す——社会関係資本の光と影」に掲載されていた論文群（町村ら 2017）は、「ちゃんと考え切る」上で私に重要な手がかりを与えてくれました。

振り返れば、現地調査は私にとって武器であったと同時に、「甘え」の源泉でもありました。私の密接なフィールドとの関係性から得られる情報は、そのままだでも（それなりに）私にオリジナリティをもたらしてくれるものだったからです。でも、それに頼ってはいは「書くにつまらない」状況は（少なくとも社会学的な面白さという点では）変わりません。

...「コロナ禍による現地調査の封印」という外圧がなかったら、私はどうなっていたことでしょうか。

課題 3) 論文やレポートを書くとき、あなたは「考え切って」いるだろうか。今までに書いた論文やレポートを読み返して、「考え切っていない」「あいまいなまま」になっている箇所を探してみよう。

5. まとめ——「問いを鍛える」へ向けて

ここまでみなさんに、私の大学院入学以降の紆余曲折にお付き合いいただきました。「研究として面白くないね」から始まった私の迷いは、いったん浅はかで姑息な方法に流れ着いたところを「社会学に対する忠誠心ですか？」に完全に打ち砕かれました。その後、フィールドで暮らす中で『問い』の再発見に至りながらも、「話すと面白いけど、書くとつまらないよね」から脱却するきっかけを掴むには、さらに長い月日と「コロナ禍」という外圧を要したという、グニャグニャした 20 数年でした。

では、今の私の「問い」はどうなっているのでしょうか。これまで繰り返し引用してきたように、A 先生は修士課程時代の私に

今のあなたの第一義的な問いは、「ゴミ問題を解決するにはどうしたらよいか」であるように思います。しかし入学当初のあなたの問いは、むしろ、「ゴミ問題が解決できないのはなぜか」にあったように思います。

とおっしゃいました。

私が研究者を志したのは、高校時代に様々な環境問題のニュースに接する中で、「環境問題の解決が、今の世の中にはとても重要なことなんじゃないか」と思ったことからでした。また、学部生時代の趣味だった野宿しながらの自転車旅を通して「現場」に触れ、環境問題と社会との深い結びつきを感じて、「社会的な問題として環境問題を捉えたい」と考えたことに、社会学を学び始めたきっかけがあります。だから実は、今でも私の基本的な「問い」は「〇〇問題を解決するにはどうしたらよいか」なのです。

ただそれは、先の『問い』の再発見でお話ししたように、『解決』とは何か」を前段階に置き、山ほどの個別の「問い」を内包した上での、「〇〇問題を解決するにはどうしたら

よいか」です。つまりは、修士課程時代の私の「問い」と、現在の私の「問い」は（字面こそ同じですが）別物になっているのです。この違いこそが、20 数年かけて私なりに「問いを鍛えた」結果なのだろうと、今振り返ればそう思います。

さて、院生時代の私と同じように「問いを鍛える以前」の状態だった読者のあなた、ここまで私の紆余曲折に接してみていかがでしたか。私と一緒に「問いを鍛える」スタートラインに立てた人は、本書の他の章へ進んでみましょう。また、「どうも自分とは合わなかったなあ」と思う人も、どうぞ他の章を読んでみてください。きっとあなたに合った、あなたの指針になるお話があるはずです。

文献

船橋晴俊, 1995, 「環境問題への社会学的視座——『社会的ジレンマ論』と『社会制御システム論』」『環境社会学研究』1: 5-20.

町村敬志ほか, 2017, 「特集 1 コミュニティを問い直す——社会関係資本の光と影」『学術の動向』22(9): 7-52

三隅一人, 2025, 「社会関係資本から社会学的問いを鍛える」『大学院から始める社会学研究——問いを鍛える作法』